
孤高の狼～軌跡～

静

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤高の狼の軌跡

【Nコード】

N7077U

【作者名】

静

【あらすじ】

谷を抜けた先の「黒狼の里」^{こくろう}で生まれた少年、ロイ。少年はやがて青年へ。過去から現在へ至るまでの彼の軌跡の物語。

登場人物紹介（前書き）

話が進むごとに増えていくと思います。

登場人物紹介

ロイ

主人公。一族の中では珍しい銀髪金眼の青年。最初のうちは少年だが、話を重ねるごとに成長していく。幼い時に同族から虐げられた影響で、誰も信用しなくなり悪意に非常に敏感である。かなり好戦的。剣士で二刀流。ちなみに酒豪である。父を超える狼になるのが野望。父とは違い、他人の問題には興味がなく常に強者と戦うことを望んでいる。

ガイル

ロイの父。髪と目の色を除けばロイと瓜二つである。一族の長。気さくな人柄で仲間から人気がある。他人の問題を見過ごせない性格。そのため一族の中では変り者とされている。歴代の長の中では最強と言われるほどの実力を持っている。妻はロイが物心つく前に病で他界している。

ゲンライ

ロイとガイルの世話をしている老人。2人からは「ゲン爺じい」と呼ばれる。

一族の中で一番の古株で、いつから長に仕えているのか不明。初代から仕えているという噂もある。(ちなみに今の長は11代目)

誰に対してもタメ口で話す。長とその息子も同様。

プロローグ（前書き）

完全オリジナルなので、あしからず

プロローグ

黒雲谷
こくうんだに

そこは文字通り、常に黒雲が空を覆い雷と雨が降り注ぐ、誰も近寄らない谷。

故にその谷に唯一存在する洞窟を抜け、ある者たちしか通ることのできない結界に守られた里があるということも知る者は誰一人いない。

ある者とは里に暮らす一族のことで、「雷黒狼らいくろう」と言う狼の一族。そして、その里は「黒狼くろうの里」と一族から呼ばれていた。

これは、この里で生まれ育ったとある青年の過去の物語

プロローグ（後書き）

とうとうやってしまった・・・。

これから更新できるか不安ですが、よろしく願いします！

父と息子

「ふゝ、今回は長旅だったな。」

1人の男が里に入ってきた。里の者にしか通れない結界をどうやって入ってきたかは、答えは1つしかない。彼はこの里の者だからだ。黒髪に赤眼、その背には身の丈ほどもある大太刀。そして、その素性は

「ん？おお、長！」

里の1人が帰ってきた存在に気付くと、他の者たちもその方に視線を向ける。

「ガイル様、おかえりなさい！」

ガイル

「おう、戻ったぜ。」

「今回の遠征はどうだったの？」

ガイル

「ああ、今までよりもなかなか手ごたえがあつたぜ。」

質問をしてくる者に一人一人答える彼の名はガイル。素性は前述の通り、一族の長である。

彼は先程まで外の世界で別の一族の問題を解決させてきたのであつた。

狼である彼がこんなことをするのは疑問があるが、ガイルは気さくな人柄でその上、他人の問題を放っておけないという一族の変わり種だからである。

ガイルは道なりに里の中を進み、やがて長が住むのにふさわしい大きな屋敷が見えてきた。見た目は日本の寺のようである。

ギイイ・・・

ガイル

「帰ったぜ・・・」

どんっ！「うおっ！？」

屋敷の戸を開けた途端、いきなり何かがぶつかってきた。それは7歳ぐらいの少年だった。

ぶつかってきた少年は仰向けにひっくり返っている。

ガイル

「おいおい、大丈夫か？」

「・・・・・・・・」

ガイルが声をかけるが、少年は仰向けになっただま動かない。顔がよく見えないので彼は自分の顔を近付ける。すると

がばっ　ゴゴンッ！！　「でっ!?!」

不意に相手が起き上がり、お互いの額が勢いよく当たった。やった本人は額をさすりながらニヤニヤ笑っている。顔はガイルにそっくりだが、銀髪で金眼。

そう、この少年はガイルの息子で幼い時のロイである。この頃のロイはかなりやんちゃな子供であった。

ガイル

「こいつ・・・・・・・・よくもやりやがったな。。。」

額をさすりながら息子を睨みつける。息子はと言つと気にせずニヤニヤと笑っている。そして

「待てやコラあ!!!!ただじゃおかねえぞ!!!!」

「へっへっへー。」

父と息子の鬼ごっこが始まった。端から見れば大人げなく見える。

「ふおっふおっふお、今日も盛り上がったのう。」

2人を和やかな目で見る老人。この老人は2人の世話役で、名をゲンライという。

彼はロイが物心ついたときからこんなやりとりを見ているので特に気にしてないのである。

ガイル

「くそ、あのガキどこ行きやがった……。」

逃げた息子を追ってガイルはキョロキョロ周りを見渡す。気配を探るうにもロイは気配を殺すのが上手く、一族の長でも見つけるのは一苦労である。

ガイル

「全く、何だってアイツはああもイタズラ小僧なんだ。俺がガキの頃はもう少し大人しかったのに……。」

などとぼやきながら歩いていると

バツシャ　　ンー！

突然天井から大量の水が降ってきた。濡れた髪をかき上げて上を見
ると

ロイ

「ひっひっひっ」。

天井裏で桶を携え、意地悪な笑みを浮かべる息子が。それを見た父
親は

ガイル

「お〜ま〜え〜……………」グゴゴゴゴ……………」

目が影に覆われ、背後からは怒りの炎のようなものが見えそうであ
る。しかし、そんな様子の父親を見ても息子は全く動じてない。そ
れどころかまだニヤニヤしている。そして

「よっ」とんっ」「！」「！」

ロイは父親の顔を踏みつけ、そのまま下に飛び降りた。
その行為でとうとうガイルの頭の中でブチっという音がした。

「もう許さん！……！覚悟しろクソガキ！……！」 ドカアアアーン！
！！

「……！！」 ビクッ……！！

怒りが爆発したガイルを見たロイは流石にヤバいという表情になり、
一目散に逃げ出した。

しかし、当然そのまま逃がしておくガイルではなくすぐさま息子を
追いかけ始めた。

「今日という今日は許さん！……！絶対にシバいてやる！……！！」
「ギャ ……！！！！」

大の大人が子ども相手にそんな大人げない言葉を言ってもいいのか
疑問があるが、2人はその後しばらく館の隅々まで走り回ることに
なる。

？？ ？？ 約1時間後？？ ？？

「待てクソ坊主 ……！！！！」

「ギャ ……！！！！」

ゲンライ

「やれやれ、よく飽きないでやっとするのう。」ズズ……

ゲンライは自室でお茶を飲みながら2人の鬼ごっこを静観している。2人はさつきからこの部屋を行ったり来たりしているののでいつ自分にとぼつちりが飛んで来てもおかしくないのだが。そして「ふう」と一息ついて湯呑を床に置いた瞬間

ガチャン

何かが割れるような音が。その音を聞いた2人はピタッと走り回るのを止め、音のした方へ顔を向けた。

するとそこには壁のそばで真っ二つになった湯呑が……。

「……」

2人は顔を見合わせ、冷や汗がたらたらと垂れ始めた。そしてその場をそくそくと去ろうとした。
が、

「おっと何処へ行くこうとこのかな、小童共……。」
「ユユユユ……」

「「！！！！」」ギクツ！！

「「すいませんでした」」

ゲンライ

「これに懲りたら、ハデに暴れないことじゃ。」

2人の頭にはコブが1つずつ出来ている。その後ゲンライのゲンコツを喰らい、3時間ぐらい説教されたのだ。あの湯呑は別に珍しい物という訳ではないのだが、ゲンライが気に入っていた物だったの
で2人は弁償することになった。

ガイルとロイのやりとりはこんな派手なものではあるが、決して親子関係が悪いという訳ではないというのは言うまでもない。

しかし、月日が経つにつれこのような父子のやりとりは見られなくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7077u/>

孤高の狼～軌跡～

2011年11月16日02時07分発行